

2015年度第2回町田市総合教育会議
議事録

- 1 開催日 2015年11月20日
- 2 開催場所 3-1会議室
- 3 出席委員 市長 石坂丈一
教育委員長 佐藤昇
教育委員 高橋圭子
教育委員 森山賢一
教育委員 八並清子
教育長 坂本修一

4 市長及び町田市教育委員会教育長の署名

市長

教育長

- 5 出席事務局職員
- | | |
|--------------|-------|
| 政策経営部長 | 市川常雄 |
| 経営改革室長 | 榎本悦次 |
| 政策経営部次長 | 中村哲也 |
| (兼) 企画政策課長 | |
| 学校教育部長 | 吉川正志 |
| 生涯学習部長 | 田中久雄 |
| 学校教育部次長 | 高橋良彰 |
| (兼) 教育総務課長 | |
| 指導室長 | 宮田正博 |
| 教育総務課担当課長 | 高橋由希子 |
| 指導課統括指導主事 | 熊木崇 |
| 指導課指導主事 | 大山聡 |
| 生涯学習部次長 | 小口充 |
| (兼) 生涯学習総務課長 | |

財務部長	馬 場 昭 乃
文化スポーツ振興部長	田 後 毅
子ども生活部長	小 池 晃

6 議題

- (1) 子どもの学力向上について
- (2) 子どもの体力向上について

7 公開又は非公開の別 公開

8 傍聴者数 9名

9 議事の概要

【午後3時30分開会】

○中村企画政策課長

定刻となりましたので、ただいまから、2015年度第2回町田市総合教育会議を開会いたします。総合教育会議の事務局であります政策経営部企画政策課長の中村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会にあたりまして、市長からごあいさつをお願い申し上げます。

○石阪市長

本日が今年度第2回目の総合教育会議になります。お忙しいところ、お越しいただきまして、どうもありがとうございます。前回の会議で若干お話をさせていただいた問題もありまして、その意味では、今回はもう少し踏み込んだ話ができたらと思いますし、何よりも教育委員の皆さんのお考えというものを私がしっかり受け止められるか、そういう会議でございます。「ここはどう、あそこはどう」ということをどんどん言っていただければと思います。

当然、少子化という流れというのは、今のところ止めようもないわけでありまして。そうすると、やはり子どもたちの発達というんでしょうか、学力といったものも含めて、そこに分けられる資源というのは相対的に大きくなっているはずなんです、そうもいかない

という状況です。では、どうしてそうなのかというところを、やはり保護者も地域社会も学校のほうも考えていただかなければならないと思います。私のほうは市長の部局ですから、その意味では、色々なところで、教育も含めて接点がたくさんあります。その中から感じるのは、やはりみんなで支えるしかないなということです。学校教育は特にです。悪く言えば、責任を押しつけるような思考はやめたほうがいいなというふうに思っています。その意味では、この会議はみんなで一緒にやるんだよというところを確認する場なのかなと私は思っております。そこに意味があると思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○中村企画政策課長

ありがとうございました。引き続き、議題に移ります。本日の議題は、1、子どもの学力向上について、2、子どもの体力向上について、3、2016年度教育予算についてでございます。それでは進行につきまして、市長、よろしくお願いいたします。

○石阪市長

それでは、今日は議題が3つあります。

最初の子どもの学力向上についてということで話に入りたいと思います。

学力向上というくらいですから、前と比較してどうだということがポイントだと思うんですね。1つは経年的比較というんでしょうか、年次的比較。もう1つは横の比較というんでしょうか、そういうことが話題になろうかと思います。昔に比べてどうだということと同時に、他と比べてどうだということですが、純粹に町田市の子どもの学力だけを取り出してというのはなかなか難しいわけで、どうしても比較の話になるのかなと思います。その意味では、4月の全国学力・学習状況調査がありましたので、その辺りから入っていったらいいかなと思っております。その後、どこに課題があるのかというところのお話をいただいて、親御さんもそうだし、地域もそうだし、学校もそうなんですが、どうすべきかというところまで話ができればと思います。

それでは、まず調査報告書の説明をお願いします。

○坂本教育長

この調査結果につきましては、担当の指導室長からご説明させていただきます。

○宮田指導室長

指導室長の宮田でございます。それでは、お手元の資料につきましてご説明をさせていただきます。今年度の全国学力・学習状況調査の結果についてです。資料の1ページ目をご覧ください。今年度の全国学力・学習状況調査は、4月21日に小学校6年生と中学校3年生の全員を対象に、国語、小学校は算数、中学校は数学、そして理科で実施をいたしました。国語と算数、数学に関しては、知識を問うA問題と活用する力を問うB問題に分かれております。なお、今年度、理科を実施しておりますが、この理科につきましては毎年実施しているものではなく、2012年度に実施して以来、今回、2回目の実施ということでございました。

町田市の児童、生徒の平均正答率は、そこにお示ししておりますけれども、全国の平均よりは高く、そして東京都の平均よりはやや下回っているという数字が見てとれるかと考えます。またA問題とB問題を、国語、算数、数学で比較をいたしますと、活用する力を問うB問題のほうをより高めていくことが必要であると考えております。

では、2ページ目、3ページ目をご覧ください。グラフが載っておりますが、このグラフは町田市の平均正答率と全国、また東京都の平均正答率の差を表したものでございます。グラフが2種類ございますが、まず向かって左側の点の模様のグラフは、町田市と東京都との差を表したグラフでございます。その右側に縞模様のグラフがありますが、こちらは町田市と全国との差を表しているものでございます。ゼロよりも低い場合は町田市のほうが低い、ゼロよりも高い場合は町田市のほうが高い、ということを示しているグラフでございます。例えば2ページ目の下段右側、「算数B 都及び全国との差」というグラフを見ていただきますと、平成25年、26年、27年の3年間で徐々に東京都との差が少しではありますけれども少なくなってきた、全国との比較では、平成25年はマイナスだったものがだんだん上がってきているということが読み取れるかと思えます。

3ページの中学校のほうを見ていただきますと、上段の左側の国語A、また下段の数学A、数学Bのグラフからは、東京都との差がマイナスからだんだんプラスとなり、全国との比較で上回り方がだんだん大きくなっているといった結果が読み取れるかと思えます。

5ページをご覧ください。この学力調査では、算数や数学の調査とともに、日常の学習状況や生活状況についても、児童生徒に直接回答してもらっております。その中でいくつか特徴的なことをご説明いたします。

5ページの表の中の①の数字は、「平日の学習時間が2時間以上ある」と答えた児童生徒

の割合を示したものであります。町田市の小学生は、「2 時間以上」と答えた生徒が 29.6 パーセントいます。全国の平均よりは高い数字が出ておりますが、東京都平均よりは低いという数字であるということが分かります。同じ①の中学校のほうを見ていただきますと、町田市の生徒は 39.0 パーセントです。全国よりも東京都よりも高い割合であるという結果が出ております。

下のほうの⑧をご覧ください。⑧では、「授業の最後に学習内容を振り返る活動を行っていますか」ということを聞いております。町田市の小中学生は、東京都の平均よりも低い数字となっております。そういう意味では、授業の中で振り返る活動というものを、あまり子どもたちは意識して行っていない。場合によっては、先生方がそういう場面をあまり設定していないということが読み取れるかと思えます。

その下の⑨をご覧ください。⑨は、「授業の目標やめあて、また授業のまとめをノートに書いていますか」ということを聞いております。町田市の小中学生の数字を見てみますと、東京都の平均よりもやや低く、そういう意味では、授業の目標やまとめといったものを、東京都の平均と比べると、あまりノートに書いていないといった結果が出ております。今申し上げたことは、子どもたちの回答でありますけれども、先生方が授業の中でそういう場面を設定しているかどうかということにも大きな影響があるかと感じています。

6 ページをご覧ください。6 ページのところでも、今、子どもたちが答えている調査結果を載せておりますが、ここでは学力調査の平均正答率が高かった上位の学校と低かった下位の学校を載せております。例えば、表の中の③をご覧ください。③は、「平日の学習時間が 2 時間以上ありますか」という質問項目でございます。小学校を見ていただきますと、学力調査の平均正答率が高かった上位校は 48.4 パーセントという数字になっておりますけれども、下位の学校は 17.4 パーセントと、大きな差が出ております。

その下の④ですが、これは平日ではなくて、土曜日や日曜日など学校が休みの日にどのぐらい勉強していますかということで、2 時間以上と回答した数字を出してあります。そこで見ても、やはり上位校と下位校には差が出ているということが分かります。

その下の⑥をご覧ください。⑥は、「学校が休みの日や放課後に本を読んだり、図書館に行っていますか」という質問でございます。小学校の上位校は、57.9 パーセント、下位校は 19.0 パーセントと、これも大きな差があるということがこの結果から読み取ることができます。

7 ページをご覧ください。7 ページには、こういった中で教育委員会がどのような取組を

してきたのかということをごまかせていただきます。教育委員会では、2013年度から学力向上推進委員会を設置いたしまして、学力向上推進プランを策定し、学力向上に取り組んでまいりました。

具体的には、思考力、判断力や表現力などのわかる学力を高めるための効果的な指導法を研究・検証する学力向上パイロット校の指定、また基礎基本の学力を高める学力向上モデル地区の指定などの研究校を核とした取組を行っております。特に学力向上パイロット校につきましては、思考力や判断力、表現力などを活用する力を伸ばすために、子ども同士がお互いの考えを認め合って話し合う、協同的探究学習という授業方法を取り入れ、思考力や表現力を高める取組を行っております。今年度は、全校で、この協同的探究学習の取組を始めております。

10ページをご覧くださいませでしょうか。10ページには、過去3年間の平均正答率の上位校と下位校の差を載せてございます。例えば一番上の2013年度のところでご説明いたしますと、2013年度の国語Aの問題においては、町田市の上位校は74.6パーセントという正答率でございます。下位校は、同じ国語Aで49.4パーセントであり、上位校と下位校の間では、25.2パーセントの差があるということがわかります。国語Bにおいては、上位校と下位校の差は30.4パーセント、算数Bにおいても30.8パーセントの差があります。2013年度、2014年度、2015年度と、ずっと見ていただきますと、小学校の上位校と下位校では、25パーセントから40パーセント近くの差があるということが読み取れるかと思えます。右側の中学校のほうを見ていただきますと、小学校ほど差は大きくありませんが、それでも14から25パーセント程度の差があるということが読み取れるかと思えます。

11ページをご覧ください。先ほど申し上げました研究校の1つであるパイロット校の取組の成果をご説明いたします。国語のパイロット校である南第一小学校をここでは取り上げました。南第一小学校の過去3年間の平均正答率をお示ししております。見ていただきますとわかりますように、平成25年度は東京都や全国の平均よりも下回っておりました。この間、パイロット校として取り組んできたことによりまして、特に平成27年度は全国や東京都の平均を上回り、成果を上げているということが、グラフや数字から読み取れるかと思えます。このような成果を上げている取組を全校に広げていくことが必要だろうと考えております。

では、14ページ、15ページをご覧ください。ここでは、町田市と近隣の市との比較を載せてございます。今年度の他市の数字が出ておりませんので、平成26年度の結果を比較さ

せていただいております。

また 16 ページ、17 ページにおきましては、正答数の分布をお示ししてございます。

最後に 18 ページをご覧ください。学力調査を行いますと、新聞等で都道府県別の平均正答率というものが報道されますけれども、過去 2 年分の小学校と中学校の都道府県別の平均正答率をここにお示しいたしました。東京都の平均正答率は、これを見ていただくと、全国の中では、ある程度上位に位置しておりますが、冒頭申し上げましたように、町田市の平均正答率は東京都をやや下回っておりますので、全国の中では東京都よりもやや下回った位置にあるとご理解いただければと思っております。

以上で説明を終わりたいと思います。

○石阪市長

ありがとうございました。学力調査について説明をいただきました。たくさんありましたが、委員の皆さんからそれぞれ感想というか、どのようにこの結果を見ているかということで、お話いただければと思います。まずは八並委員からお願いします。

○八並委員

ただいまの宮田指導室長からのご報告にもありましたが、資料の 10 ページにあるように、上位校と下位校の差が非常に大きいということが分かりました。平均点だけで論じることはできませんけれども、それぞれの学校ごとにきめ細かい分析が必要だと思えます。特に下位層の学校の分析が重要であると感じました。学校によっては、学年間の格差などもあると聞いておりますので、各校の聞き取りなどを丁寧に行い、どのような課題があるのかを分析して、その対策を講じる必要があると思いました。

○石阪市長

ありがとうございます。11 ページのパイロット校の南第一小学校というのは、教科は国語ですね。

○宮田指導室長

はい。国語を中心に取り組んだ研究校でございます。

○石阪市長

算数は。

○宮田指導室長

11 ページの下に記載してあります町田第六小学校が算数の研究校です。

○石阪市長

町田第六小学校は、都や全国とは平均正答率が開いてしまっているんですか。

○宮田指導室長

町田第六小学校は、今年はなかなか成果が数字としては表れてきませんでした。

○石阪市長

そうですね。上位校と下位校の差は、実感としてだんだん縮まっているんですか。

○宮田指導室長

10 ページの上位校と下位校の差というのは、年度によって、問題ごとの平均点の上下がありますので、一概に言えるものではありませんけれども、差が縮まっているとか広がっているということはないと考えます。どの年度においても、一定の開きが上位校と下位校の中ではあると思います。

○坂本教育長

今回の学力調査結果を見ますと、下位層に位置づけられる学校というのはA問題、つまり基礎知識の正答率が低いということ、それと記述問題における無解答率が高いというような傾向がございます。このことは基礎基本が定着していない、あとは応用力が不十分な子どもたちが多いといったことが推測できるかと思っております。

○石阪市長

そうすると、基礎がだめで応用もだめという話になってしまいます。この言い方は誤解を受けてしまうといけませんが、全体を押し上げるには、平たく言うと、平均正答率を下

げている学校を持ち上げないと上がっていきませんよね。点数の話ではなくて、下位校をどうやって上げていくかという考え方でいいのかなと思うんですが。教育長もそういう考えですか。平均でものを考えるか、下位校を上げていくかという。

○坂本教育長

下位層の学校を、実際に市教委訪問などで訪れることがあるんですが、そういう学校を訪問したときに、授業中に子どもたちが騒いでいて、授業規律というようなものが十分に保たれていなかったり、落ち着いて授業を受けることのできない課題のある子が多かったりいたしまして、いわゆる生活指導とか生徒指導とか、そのようなことに教員が多くの時間を費やしてしまっていて、疲弊しているといったような様子を見ることができます。

○石阪市長

教員が疲弊してしまうと。

○坂本教育長

それから、別のことを申し上げますと、さっき説明がありました質問紙調査、これは子どもたちのアンケート調査のことですが、その結果からは家庭での様子がある程度分かるわけです。下位に位置する学校の子どもたちというのは、テレビを見たりゲームをしたりする時間が多い、あるいは、家庭における学習時間が少ないといった、そういう傾向が見られると思います。その意味では、やはり下位層に位置する学校には様々な点で課題があると思いますので、それらの学校に効果的な取組を考えて、実行していくことが求められているのではないかと考えております。

○石阪市長

それはパイロット校や教科に着目しているわけじゃなくて、もう少し広い着目の仕方なんですよね。簡単ではなさそうな話なんです。そうですか。やはり結果から見ると、こういう言い方になると思うんですが、生活環境とか家庭環境とか、色々なものが影響しているということになるんでしょうか。高橋委員どうですか、その辺りは影響しているようですか。

○高橋委員

はい。やはり影響していると思います。家庭の中での教育力が、子どもたちに影響しているだろうし、生活習慣などに関しても、やはり家庭学習をきちんと行える時間を家庭で持っているかどうかであるとか、きちんと食べること、寝ること、そういうことをきちんとやっているかであるとか、こういうことも大きく影響しているのではないかなと思っています。

○石阪市長

その部分は教員が直接関わるような教育の現場ではないですよ。そこは学校単位ではなくて、やはり教育委員会でどう考えるかということだと思んですが。どうですか、委員長。

○佐藤委員長

こういう学力の調査があって、そのデータが出て、それで「どうなの？」と言われると、おおよそこういう平均正答率なるもので見てしまうのですが、平均ということは、平均を上げている子どももいれば、平均を下げている子どももいるので、平均点はどうかとか、町田市ではどうかということよりも、町田市で言えば、学校ごとにどういう数字がどのように変移しているかを見るべきだと思います。その意味では、先ほどから上位校、下位校の違いなどというものもありますが、そういう学校ごとの数字を見て、そこにその学校、あるいは地域のどういう課題があるのかということ进行分析していかないと、色々なことが見えてこないなと思います。それから、度数分布表という、何点から何点までは何人で、その学校の子どもがそれぞれ何点取っているかという、あるいはA君は何点取っているかというものがあるのですが、学校でも同じように子ども一人一人の数字をちゃんと見て、もし平均を大きく下げているような子どもがいるとすれば、その子どもにどういう課題があるのかを分析していく必要があるだろうと思います。

ですので、市長が先ほど、誤解を持たないようにと言いながらお話になりましたが、私も、もし平均点でものを言うならば、平均点を下げている子どもたちがどういう課題を持ち、どういう環境にあるかというところを細かく見て、そこに手だてをしていくということが大事だろうと思います。恐らく学校ごとにいろんな課題を抱えているのではないかなと思っています。

○石阪市長

今回の調査に対しての、学校ごとの分析はもう終わっているんですか。

○宮田指導室長

各学校には、すでにこのデータは送られておりますので、現在、各学校では、この結果をもとにどのように改善するかというプランを立てている段階でございます。

○石阪市長

そうですね。どのようにするべきかということなんですが、向いている方向としてというか、分析の仕方はこのようにやるから、その視点に沿って分析しなさいよということになると思うんですね。分析に視点がなければ一歩も前に進まない。分析作業で何を分析していいかわからないということになります。先ほどのデータについて、学校としてというより、教育委員会として、その視点についてこういう方向でとか、分析するときこういう分析をするように、というようなことは言っていないのですか。

○宮田指導室長

各学校には、まずは自分の学校において、先ほど市長の言われましたような経年、これまでの結果がどういうふうに積み重なってきているのかという視点で分析をしてもらっています。確かに、この学力調査を受ける子どもたちは毎年替わり、対象の児童・生徒が違うわけで、また教えている教員にも異動があって替わっていくものではあるのですが、そういうものを勘案しながらも、結果は毎年積み重なっていますので、経年の変化をしっかりとつかまえることが大事だということです。

もう1つは、やはり分析の視点として、教育委員会が学力向上推進プランで掲げている基礎基本のできる学力というものと、応用力のわかる学力というもの、そして子どもたちの学習意欲というもの、これらが各学校でどういう状態にあるのかということ、先ほど説明した質問紙調査の結果も含めて、町田市全体の平均や、場合によっては地域の小学校、中学校で、そういった情報、結果を共有しながら、自校の課題を明確にして取組を考えるというところで、分析をしてもらっています。

○石阪市長

ありがとうございました。今、3つおっしゃったことで、私が勝手に解釈すると、XとYとZというんでしょうか、軸としては3つあると思うんですね。経年変化としての動向がどうなっているかということと、それとは別に、基礎のところや応用が市平均に対してどこにいるかということ、それに対して質問紙調査、子どもの回答の調査でいざどこにいるかという、今言った3つで「ここにいる」という認識を、各学校の校長先生は持っているんでしょうか。

○宮田指導室長

各学校では、それを自分の学校の学力向上推進プランという形でまとめ、それに基づいて次の年度の教育課程を編成し、取り組む方針を決めております。

その意味では、校長先生方は、その結果をもとに、今、まさに来年度の教育課程を編成する時期ですので、そこに落とし込もうとしていると考えております。

○石阪市長

ちょっと質問を変えて教育長にお尋ねします。先ほど、協同的探究学習というものについて話がありましたが、あれは、そうやるほうが学習効果が高くなるという前提でやっているわけですよね。結果としても、そう出ていると思うんですが。それなら、62校全校に対して、教育長がそのパターンでやりましようと言ってしまったほうが早いのではないかという気がしたんですが。こういうことは、教育長が指示してしまえば良いのではないですか。そういうものではないですか。

○坂本教育長

各学校での取組としては、先ほどご説明しました学力向上推進プランの中で、その取組の柱として、協同的探究学習という手法を取り入れているわけです。この協同的探究学習というのは、思考力とか判断力、表現力など、いわゆる応用力を伸ばすための1つの手法でして、この手法を取り入れた授業では、子ども同士が互いに考えを認め合うとか、話し合うことで、より良い考え方を作り出していけるというような工夫をしたものでございます。その現場で、先ほど申し上げたような南第一小学校での結果も出ているわけです。また、この協同的探究学習というのは、他の子どもたちとの関わりの中で、良い解決法を見出していこうという1つの手法でございまして、互いの考えを聞き合うとか認め合うとい

う意味では、学力向上だけではなくて、例えばいじめの防止だとか自己肯定感というか、少なくとも自分はここにいていいんだというような自覚を持てる、そんな子どもたちに身に付けてほしい力を付けさせる手法の1つだと考えているわけです。ただ、それだけでいいというわけではもちろんございません。応用力の前提である基礎とか、基本的な知識、あるいは学習意欲などもバランス良く身に付けていかなければならないと考えております。

この学力向上推進プランは、今年の3月に策定して、5月に学力向上推進フォーラムというものを市民ホールで開催しまして、全校の教育関係者や保護者などに参加してもらい公表したのですが、ぜひ全校で取り組んでほしいという形で、各校に指示をしているところでございます。

○石阪市長

皆そのように受け取って、校長先生は頑張っているという感覚はありますか。森山委員いかがですか。

○森山委員

先ほどからのキーワードになっています「学校ごと」に主眼が置かれるということですが、やはり学校の特徴がございまして、その中でどのように捉えていくかとか、あるいは取り組んでいくかについての温度差もあるでしょうし、あるいは重点目標といいますか、どこに力を入れるのかということが、自ずから学校が取り組む内容にシフトしていくものだと思います。特に各学校における取組の特徴はそこで出てくるわけです。それぞれ、それは学校ごとの、校長というよりも恐らく教職員が理解をして、その中で取り組んでいる内容かと思われまます。ただ、先ほど「基礎学力」という言葉が出ましたが、やはり下位層の学校は、基礎学力を育まねければ、なかなかB問題というか、思考、応用的な問題に到達できないということもありますので、そこについては、町田市が推進しているプランもそうですが、もう1つは、やはり基礎学力を徹底的に育んでいくような要素も、方法として検討する必要があるのではないかと私は思っています。

○石阪市長

ありがとうございます。先日、ある中学生と話をする機会があったんですが、その子の場合だけなのかもしれないのですが、会話をしていると、全然やる気がないというか、上

のほうに、成績上位に行こうという意欲そのものがないんじゃないかと疑うくらいなんです。もう諦めている雰囲気と言いますか。ちょうど定期試験が終わった頃で、ほっとしていたということもあるのかもしれませんが。保護者と家庭との関係を見ていてどうですか、高橋委員。

○高橋委員

そうですね。子どもが本当にやる気を持たないというのは、保護者にとってとても頭の痛いことで、それは学校にとっても同じことだと思うのですが、私は、やはり先生方の授業の内容が関係していると思います。授業が楽しければ、子どもたちは学びたいと思うだろうし、その中で自分のことを認めてもらえたり、またできないことが少しでもできるようになるとやる気が出てきます。先生方のやる気を引き出す授業力が本当に大事なのではないかなと思います。先ほど、南第一小学校の話が出ていましたが、教育委員になって研究発表をする学校に行くのですが、そこでは学校全体が、つまり子どもたちも、先生方も本当にいきいきしているな、明るく輝いて見えるなということがよくあるんですね。それは、やはり先生方が研究という名のもとでチームワークを保ち、子どもたちに対してどういう授業を行えば本当のやる気を引き出すことができ、学んだことを定着させられるかということを考えているからだと思うんです。私は、やはり先生方の意識の向上とか、やる気とか、チームワークというものが何よりも大事で、これが子どもたちの学力向上に繋がっていくのではないかと思います。私は、先生が変わることで授業が変わるし、授業が変わることで子どもたちが変わっていくと考えています。

研究発表をする学校もあれば、発表はしませんが、独自にその学校で研究をやっていくこともあるのですが、教育委員会の仕組みとして研究発表といった機会がたくさんあれば良いなということを感じています。

○佐藤委員長

私もかつて中学生と接していた時間がありますが、勉強に対して意欲が持てないという子どもにどうするかと言われたら、当面は、今、高橋委員のおっしゃったように学校の先生に期待をするしかないと言いますけれども、そんな単純なことではないだろうと思っています。意欲が湧かない状態になってしまった背景には、もっと色々なことがあると思います。色々なことに興味を持って関わられるような、自由な環境の中で育っている子どもが

いる一方で、いつも責められていて学力の結果で評価され続けていたとすると、それが嫌で、学業というものは辛いものだと思込んでしまっているという子どもも中にはいるということを感じます。現在は高橋委員のおっしゃるように、先生に頑張ってもらうしか手だてはないのですが、話は簡単ではないだろうなと思います。

○石阪市長

今、どちらかというと、下位校に議論が集中しているんですが、その辺りは八並委員いかがですか。

○八並委員

そうですね。やはり基礎基本を定着させるということは、学校もそうではありませんけれども、やはり家庭学習といいますか、家庭の役割というのが非常に大きいのではないかと感じています。資料にもございましたが、14 ページなどに近隣の市の取組が載っておりますが、この中でも八王子市の取組の1つとして、『家庭への期待「はちおうじっ子家庭学習のポイント」家庭学習の4つのポイント』ということで、実際に家庭でこういうことをしたら良いのではないかとことを示しています。もちろん町田市教育委員会でも、家庭学習に向けたパンフレットを家庭に配っておりますし、また学力向上モデル地区の1つである本町田東小学校では、やはり家庭学習の環境を整えるということをまず一番にしなければいけないということで、「東っ子の3つの約束・家庭学習の手引き（かがやけ東っ子）」というものの中で、家庭や児童の具体的な行動について学校から示されています。

例えば、家庭学習における保護者の役割としては、落ち着いた環境で学習できるような工夫をする。具体的に言うと、テレビを消す。机の上を片付ける。学習用具を整える。次に、子どものやる気を引き出す声かけ。「勉強しなさい」ということだけではなくて、「机に向かって頑張っているね」というような声かけです。それから、教科書やノートを見て、子どもは今どんな学習をしているのかということを知ることが、家庭学習の大きな具体的な行動になっているということが示されています。また、研究発表の講師の方からも、子どものノートを親が見ることは、非常に重要な家庭学習の位置づけになるという報告もされております。このような形で、具体的な方策をとるということも1つの手だてになってきているのではないかと、市内の学校での取組事例があります。

○石阪市長

ありがとうございます。森山委員、何かお気づきになったところはありませんか。今は家庭の話に寄っていましたが、学校の話ではどうでしょうか。

○森山委員

これは私自身の考えでもあるのですが、やはり学力をどう捉えるかというところを、ある程度検討する必要があると思います。少なくとも学力を考える場合には、学んだ力として、いわゆる勉強して学んだ結果として、知識とか技能というものがあるわけです。それだけを学力として捉えるということ自体が、いろいろ問題があつて、極端なことを言いますと、先ほど意欲についての話が出ましたが、あれはまさに学ぼうとする力です。これは、やはり重要な学力の要素として位置づけられるわけです。もっと厳密に言えば、関心とか意欲とか態度というものです。これもやはり学力の非常に重要な要素というふうに、教員が理解しなければならないわけです。それから、もう1つは、自ら勉強しようという、あるいは何か興味のあることに取り組もうとしたときには、必ず自分で学ぶ力というか、いわゆる学び方という、学習のスキルのようなものが大事な学力の1つなわけです。

ですから、学んだ力とか、学ぼうとする力とか、学ぶ力とか、そういう様々な学力の側面を捉えて、その中で数字だけのことではなくて、そこにどういう関係があるのかということそれぞれの学校が理解していくべきであつて、ピンポイントで「これをやればこうなる」というような、単純なものではないと理解しています。

○石阪市長

教育長、まとめとしてどうですか。

○坂本教育長

先ほど市長から、教育委員会として、町田市の小中学校全体の理念なり、方向性なり、学力向上に向けての指導方法を一律にといいますか、統一した方法で全校に流さないのかというようなお話がありました。確かに教職員の方向性というか、向かう方向を示すということも大事だと思います。一昔前に、「あれをやれ、これをやれ」と教育委員会が色々な施策を考えて各学校におろすということが流行っていた時期があつたと思うのですが、特に町田市は地域ごとに様々な環境とか、子どもたちの状況もそうですし、保護者、家庭の

状況もそうですが、いろんな違いが地域によって生じているということもございますので、今は学校に対しては、一律に「あれをやりなさい、これをやりなさい」という指示をしても、なかなか物理的、環境的、条件的にできない部分が多々あると思うんです。

教育委員会としてできることというのは、例えば、各学校が子どもたちの実態に合わせて自主的に独自に色々な学力向上の施策を立てるにあたって、教員の資質、能力をいかに高めていくかということがあると思います。これには研修等の工夫が必要だと思うのですが、そのような機会を用意することであるとか、あるいは教員の意欲の向上といいますか、モチベーションを常に維持し高めていくというような働きかけ、こういったことが非常に大切だと思っているところです。そのために学力向上、体力向上の様々な施策において、研究をするため、させるための制度などを教育委員会で用意しておりますし、そういう研究指定校の数を増やすとか、内容を充実していくとか、そのような形で各校に研究を奨励して教員の意欲向上のために努めていくことが重要だと思います。

この10月から11月にかけて、各校で様々な研究発表会が行われていますが、研究の発表自体も結構素晴らしいものがございましたけれども、私が見ていて強く感じたことは、教職員が一丸となって一つの事に取り組んで向上させようという、その意欲が学校全体の雰囲気を変えているということです。研修にしろ、研究の奨励にしろ、そういった各学校の取組を教育委員会として支援していくような働きかけというものを中心に行っていくべきではないかと考えております。

○石阪市長

今の点、委員長はどうですか。

○佐藤委員長

今、教育長もおっしゃられた方向性というか、考え方というものは賛同できる場所です。私も教育委員の立場で応援していきたいと思っております。

○石阪市長

このようところで、まとめをさせていただきます。

2番目の議題の、子どもの体力向上に移りたいと思っております。まず、資料がありますので、その説明をお願いします。

○坂本教育長

調査結果の資料について、担当からご説明申し上げます。

○宮田指導室長

それでは、今年度の全国体力・運動能力、運動習慣の調査結果についてご説明いたします。

資料をご覧ください。資料の1ページには、この調査の概要が書かれています。この調査は、毎年1学期に、小学校1年生から6年生、中学校1年生から3年生と、全小中学生を対象に実施しております。調査の内容は、小学校、中学校とも、握力や上体起こしなど、8種目ありますが、その中の5番目の種目に関しましては、小学校は20メートルのシャトルラン、中学校は持久走または20メートルのシャトルランという形で、いずれも持久力を確かめる種目です。また、8番の項目のボール投げに関しても、小学校はソフトボール投げ、中学校はハンドボール投げと、若干の違いがあります。

2ページ、3ページをご覧ください。小学校5年生と中学校2年生の結果をお示ししております。種目によって記録の数値や単位が違いますので、全国の平均を50とし、偏差値で比較をしたものがこの八角形のグラフです。正八角形が全国の平均を表しています。内側の太い点線が町田市の結果、薄い点線は東京都の結果です。グラフを見ていただくと分かりますように、小学校5年生の男子・女子、中学校2年生の男子・女子、全てのグラフでへこんでいるのが立ち幅跳びと20メートルシャトルランです。そして、ややへこんでいるところが、ボール投げ。この3つの種目について低い傾向が出ています。東京都の結果も同じような傾向になっています。

次に、最後のページになりますが、27、28ページの表をご覧ください。先ほど申し上げましたように、この調査は8種目ありますが、単位や調査の数字がそれぞれ違いますので、この表のように1点から10点までの10段階に得点を換算し、結果を集計しています。その集計結果が4ページから6ページに示されております。新聞報道などで都道府県別の結果が出ておりますけれども、今年度の結果はまだ文部科学省から公表されていませんので、昨年度の2014年度の結果を4ページに載せております。小学校5年生の男子・女子と、中学校2年生の男子・女子の各都道府県の結果が記載されています。

見ていただくと、小学校5年生は概ね全国に近い数字が出ている年が多いのですが、中

学校 2 年生に関しては、東京都または町田市のいずれも、全国と比較してかなり低く、下位の結果になっております。

8 ページをご覧ください。町田市の小中学校の体力調査の 8 種目の合計点の上位校と下位校の差を、先ほどの学力調査と同じようにお示ししております。今年度の小学校 5 年生の男子を見てもと、体力の上位校に関しては、総合点 59.4、下位校が 49.2 と、10.2 ポイントの差があります。このように見ていきますと、年度、男女、学年によって差がありますが、2014 年度の小学校 5 年生女子を見ますと、その差が 16.2 ポイントと大きい年があります。

9 ページをご覧ください。小学校の項目に、この調査のまとめとして 4 つ記載いたしましたが、4 点目には、2014 年度・2015 年度オリンピック・パラリンピック教育推進校に指定して、コーディネーショントレーニングに取り組んでいる南第四小学校のことをお示しました。南第四小学校は、1 年生の時は 2 種目だけ全国平均の点を上回っていますが、2 年生では 4 種目が上回るようになり、4 年生では 5 種目が上回っています。学年が上がるにつれて、体力が数値として伸びてきているという結果を示しており、推進校としての成果を出している学校であると考えております。

10 ページをご覧ください。このページからは町田市の小学校 5 年生男子・女子と中学校 2 年生男子・女子の 8 種目の得点分布をお示ししております。

12 ページ、13 ページをご覧ください。12 ページが小学校 5 年生の女子、13 ページが中学校 2 年生の女子の種目毎の分布です。一番下の丸がついているのが、立ち幅跳びとボール投げです。小学校 5 年生は、分布の山がある程度はっきりと出ていますが、中学校 2 年生の立ち幅跳びとハンドボール投げを見てもと、得点の低いほうに山が潰れていることが読み取れるかと思えます。この点も課題と考えております。

18 ページをご覧ください。この体力調査におきましても、子どもたちに質問紙調査を行っております。18 ページでは、1 週間にどの程度運動をしていますかという質問に対する結果をお示しいたしました。その中で、1 週間に 420 分以上運動をしている、つまり、1 日 60 分以上運動しているという子どもたちの割合ですが、町田の子どもたちを見てもと、東京都や、体力調査ではトップと言われている福井県と比べ、それほど大きな差ではありませんが、やや低いという結果が出ております。

次に 20 ページをご覧ください。運動やスポーツが好きか嫌いかということも質問しております。これについても、町田市、東京都、福井県、全国の結果をお示ししておりますが、

丸があるところをご覧くださいと、町田の子どもたちは、運動が「きれい」、「ややきれい」と答えている割合が、それほど大きな差ではありませんが、東京都や福井県に比べると高いという結果が出ていることが分かります。

21 ページにお示ししましたように、当然のことではありますが、運動やスポーツが好きだと答えている子どもは体力合計点が高い結果が出ておりますので、この点が課題であると考えております。

22 ページ、23 ページをご覧ください。ここでは、各小学校、中学校が体力向上にどのような形で取り組んでいるのかといったことをまとめております。体育の授業中の取組、また体育の授業以外の時間での取組等をまとめました。

24 ページをご覧ください。それでは、町田市教育委員会ではどのような取組を行っているのかということですが、今年度から、町田市全ての小学校 42 校を 17 地区に分けて、それぞれの地区ごとの連合運動会を開催するという取組を始めております。2 校から 3 校、多いところでは、4 校の小学校が一堂に会しまして、短い時間ではありますが、一緒に競技を行うことで、学校体育の中で運動への意欲を高めるという機会にしたいと考えております。また、今後、体力向上のための推進委員会として、体力パワーアップ戦略会議や、体力向上のフロンティア校という研究校を設置することを考えております。

また 25 ページには、福井県の体力向上の取組の具体的な事例をお示しいたしました。

最後になりますが、26 ページをご覧ください。昭和 39 年から平成 25 年まで、4 種目の全国平均点の変化をお示ししております。グラフの中に東京、札幌、長野という表記がありますが、これは、オリンピックの開催年を示しております。昭和 39 年を 100 としたグラフですが、このグラフを見てみますと、ボール投げ以外に関しては、長い時間の中で上下はありますが、それほど子どもたちの体力は低下していないという結果が、全国の中では出ているかと考えております。参考のために、長い時間のグラフをお示しいたしました。説明は以上です。

○石阪市長

ありがとうございました。今の報告をお聞きいただいて、森山委員、どうですか。

○森山委員

指導室長からの説明にもありましたように、今回の結果からは、端的に立ち幅跳び、ボ

ール投げ、それから 20 メートルシャトルラン、これらの種目を子どもたちが特に苦手としているということが分かっております。これらの種目の成績を上げていくためには、やはり瞬発力や素早く動き出す能力、あるいは力強さ、タイミングの良さ、全身持久力、運動を持続する能力といった、様々な能力を総合的に伸ばしていくということが必要であると思います。したがって、子どもたちが苦手な運動特性を考慮した、継続的な取組の充実ということが求められていると思います。

○石阪市長

ありがとうございました。高橋委員はどんな感想をお持ちですか。

○高橋委員

調査結果を見ますと、体力や運動能力が高い福井県や全国に比べると、町田市の子どもたちは、体育の授業以外での運動の時間が少ないということを感じます。これを増やすための取組を考えていく必要があると思いますし、また、とても残念なことなのですが、町田市の子どもたちは、全国平均と比べて、運動やスポーツを「きらい」、「ややきらい」と回答した割合が少し多いということも大変気になっています。運動やスポーツを好きになる子どもほど体力合計点が高くなると思いますので、子どもたちが運動やスポーツを好きになるような取組も必要ではないかと思います。それは、学校の授業内だけではなくて、休み時間や放課後に行うことも視野に入れて考えていく必要があると思っています。

○石阪市長

ありがとうございます。町田市は、「スポーツで人とまちが一つになる」ということを理念に、「少年サッカーのまち」、「スポーツのまち」というものを掲げているんですが、この資料を見ると、子どもの体力はビリから 1 番目か 2 番目という結果も見られます。市長が言う「スポーツのまち」と、子どもの体力は全然関係がないということがよく分かってきて、これは問題だなと感じます。やはり、体力の底上げがないと、「スポーツのまち」と言っていられないかと、今回の調査結果を見て感じました。教育長、どうですか。

○坂本教育長

正直に申し上げて、子どもたちの体力向上については、これまで、各学校での取組に任

せていたところがあります。今後は、教育委員会としても、体力向上に向けた取組に力を入れていきたいと思っ

ていているところ

でして、先ほどの説明の中で、教育委員会のこれからの取組というものをいくつかお話しをしました。この調査結果についての文部科学省の分析によると、体育の授業が楽しいと感じている児童生徒ほど、体力、運動能力が高く、卒業した後も運動やスポーツをしようとする意欲が高いという傾向があるとのこと

です。体育の授業を通して、子どもたちが運動に楽しく取り組めるように授業の改善を図る必要があると考えていますので、先ほど申し上げた様々な取組を通じて、そのような方向に進めていきたいと思っ

ております。

なお、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、来年から、都内の全小中学校をオリンピック・パラリンピック教育推進校として東京都が指定すると聞いております。この東京オリンピック・パラリンピックの開催決定により、スポーツに対する関心が高まっておりますので、これを好機と捉えて、子どもたちがスポーツに親しんで好きになれるように、機運を盛り上げていきたいと思っ

ています。

○石阪市長

八並委員はこの調査結果についてどう思われますか。

○八並委員

調査結果の中に、子どもたちの運動の好き嫌いというものがありますが、私自身は運動が大変苦手で、体育の時間が非常に辛かったという経験があります。先日行われた南第四小学校の研究発表では、それぞれの能力に合ったグループ分けや、用具や道具についての工夫がされておりました。

例えば、ハードルの授業をやっていたのですが、ちゃんと走れる子ども、まだハードルを飛ぶのが苦手な子どもなど、それぞれの能力で色々なグループ分けがなされておりましたし、特にハードルが苦手な子どもに関しては、固いハードルではなくてソフトな素材を使った特別なハードルが用意されておりました。運動が苦手な子どもには、失敗して怪我をしたらどうしようといった、ちょっとした恐怖心のようなものもあると思っ

ていますので、このように当たっても痛くないようなハードルを使えば、できないなりに思いきり取り組むことができると思っ

ています。非常に良い工夫であると感じました。

先生方がそういった子どもたちに合った授業の工夫をされることによって、運動が苦手

な子どもの苦手意識がだんだん解消されていって、運動することに興味関心を持てるようになっていくのではないかと思います。また、運動が苦手であっても、例えば、スポーツ観戦や応援をすることは大好きという子どもも非常に多いかと思います。

○石阪市長

ありがとうございます。高橋委員は、運動が苦手な子だったのですか。それとも得意な子だったのですか。

○高橋委員

どちらかという苦手だったかもしれませんが、私が変わったのは、高校時代に部活動で体操部に入って、そこで体を動かしたということからです。今でも、ホットヨガに通ったり、体を動かしたいという気持ちになるので、やはり子どもたちにとって部活動を経験するという事は、とても大事な事だと思います。また、体力をつけるためには、まず体作りをすることが大事だと思っています。家庭においても、子どもが小さい頃から、よく食べて、よく動いて、よく寝るという生活習慣をつけて、子どもの体力を維持してあげる。そういうことを、学校だけではなく、幼稚園、保育園、もっと小さい時から保護者は認識していくべきだと思います。

○石阪市長

森山委員、それぞれの学校では、体力向上に向けて意気込みを持って取り組んでいるのでしょうか。

○森山委員

先ほど、教育長もおっしゃったように、体力向上については、ある程度学校に委ねていたというところもあり、その意味では、各校で取組に温度差があったのではないかと思います。体力向上は、学力向上と本来一体的に取り組まなければならない要素であり、やはり学力と体力の両輪で、今後は向上への方策を推進していく必要があるかと思います。学力向上の課題と方策と同じ話になりますが、教員が一丸となって授業改善に取り組んでいる学校では、教員のやる気が子どもたちにも伝わっており、体育の授業での体力向上などはまさにその通りだと思います。こういったやる気が、子どもたちの能力を伸ばすこと

にも繋がっていくと思います。教育委員会としては、学校がそのような形で目的意識を持って取り組むことができるような仕掛けや指導をしていくことが、これまで以上に必要になってくるのではないかと考えています。

○石阪市長

委員長、この調査結果についてどう思われますか。

○佐藤委員長

体力合計点というものを出して、それを都道府県別に順位を出して比較したデータを眺めていますと、皆様がおっしゃっているとおり、町田市は点数が低いという言い方になるかもしれません。ただ、先ほどの学力調査のように、上位と下位との差がそれほど大きいわけではないので、そういう点では、調査結果をもっと冷静に受け止めたほうが良いと思います。得点を1点上げれば、順位はすぐ上がるんです。この1点というのは、先ほどの資料の27、28ページの表で一枠上がることで、例えば、立ち幅跳びを頑張って練習すれば、すぐに順位が上がるのではないかと考えています。ですから、この順位はあまり心配しなくて良いと思います。私も最初は心配して、文部科学省の考え方などを少し調べたのですが、文部科学省の求めているところは、平均を出して全国の平均を超えれば良いということではなく、全員を上昇傾向にしたいということでした。

また、体力というものをどう捉えるかということですが、この調査は運動するための体力であって、もっと大事な体力は、健康に生活するための体力だと言われています。そのことも忘れないようにしないといけないと思います。市長も私も10キロぐらいのマラソンはできますが、これは健康寿命を延ばそうと思って時々やっているわけで、健康ということも体力を考える時には重要だと思っています。

それから、ここでも平均でものを言うと色んなものが見えてこないのもあって、「スポーツのまちだ」にならないのではないかと考えられますが、そんなことはありません。サッカー、野球、水泳、陸上等、運動関係での子どもたちの大活躍は沢山あります。そういう子どもたちがいる一方で、学校から帰ると塾や習い事だけで、運動は体育の授業以外はほとんどしないという子どもたちがいて、それを押し並べると平均が下がってしまうということです。そういう分析をしながら、どういうことをしていくべきか、対策を考えたほうが良いかと思っています。町田市の小中学生は運動面でも頑張っていると、私は自負しています。

○石阪市長

ありがとうございます。教育長、どうですか。

○坂本教育長

先ほどお話したように、各校の自主性に任せすぎていたところもあるのかなと思っています。今日いただきました皆様のご意見、議論の内容を踏まえて、教育委員会としての取組を改めて検討してまいりたいと思います。

○石阪市長

あとは、子どもが学校体育の時間以外で動く機会がどれだけあるかということだと思います。少し気になっているのは、就学前ぐらいの小さい頃から、体を動かす機会が減っているのかということなんです。そのような研究があるのかどうか分かりませんが、恐らく減っているのではなかと思うんです。そこで、子どもが自分で成長を感じるとか、速く走れるようになったとか、飛び上がれるようになったということが、生きていく力や喜びとして自身に跳ね返って、意欲が出てくるのだと思います。家に帰ってあまり運動していないとなると、これは難しい。保育園では、運動の取組はどうしているのですか。

○小池子ども生活部長

運動というよりは、午前中のプログラムでお散歩をしています。町田保育園の場合は芹ヶ谷公園まで歩いています。一番遠いところでは、町田保育園からかなり距離が長いのですが、かしの木山自然公園までお散歩に行ってきたということもあります。晴ればほぼ毎日お散歩をしています。保育園では園庭が狭いので、瞬発力を使うようなものはなかなかできないのですが、散歩というものが一番の運動になるのかと思います。

○石阪市長

ありがとうございます。保育園では結構運動をやっているようですね。幼稚園の子どもは家に帰ってきてどうしているんでしょうか。外で遊んだり、運動しているんでしょうか。

○佐藤委員長

私の孫が通っている幼稚園では、体操教室というものを用意していて、希望者はその教室に参加しています。自由に体を動かして遊ぶという機会や場所は、社会の変化に伴ってどんどんなくなってきているので、今のお散歩や体操教室の取組のように意図的に何かクラブといったものを組織するなどしなければ、小中学生もそうですが、運動の機会を作ることは、この時代では難しくなっているのだらうと思います。自由に、無意図的に遊ぶということはできなくなっているなという印象です。

○石阪市長

目的や意図や組織を離れて運動するのは、今の子どもはなかなか難しいのでしょうか。そうしたら、そういう場を親御さんができるだけ提供していくこと、そこに入れることが必要なのですね。皆様の周りの人は、意識して意図的に運動させていますか。八並委員、いかがですか。

○八並委員

多くの場合は、地域のスポーツクラブや習い事という意味でも、水泳、サッカー、野球、バレーボール、ドッジボールと、色んな形で参加している子どもがかなり多くいると思います。それを割合にすると、例えば、体力が上位である福井県では約7割のお子さんが参加しているそうです。それに比べると、町田市は割合が少ないのかもしれませんが、積極的に参加しているご家庭も数多くあると思います。

○石阪市長

体力が上位であるところは、地域、家庭などの学校以外での環境が良くできているという事なのではないでしょうか。

○坂本教育長

それについては、それぞれの家庭での生活や考え方でかなり差があるのではないかと思います。スポーツや外での遊びに関して積極的な家庭では、小さいうちから習い事や地域クラブに入れてスポーツをさせたり、公園などで遊ばせたりするといった時間を積極的に取っていると思います。一方で、運動することへの関心が低いといえますか、あまり外遊

びもさせず、運動するのは学校だけという形で、怪我をしては困るとか、交通事故に遭っては困るとか、色んな考え方を持った家庭があるのだと思います。そういったことから、スポーツだとか、運動、遊びを体験している子とそうでない子とで、大きな差が生じているという状況があるのではないかと感じています。

○森山委員

今の教育長のご意見にもありましたが、子どもの運動時間の減少の一因として、保護者の意識の変化が大きいと私も思っています。具体的に言えば、今の保護者は危険性を伴うことに過剰になったり、遊びを禁止したり、汚れることを嫌ったり、そういう傾向が強くなっていると思います。その意味では、放課後に子どもを外で遊ばせることよりも、塾などに通わせたいという保護者が増えているのも現状だと思います。このことを十分把握をすることも必要ですし、またある程度、保護者の運動に対する意識の改革というものが必要ではないかと思っています。

○石阪市長

ありがとうございます。2番の議題が終わらないうちに終了時間が来てしまいましたので、3番の議題は次回以降にします。最後に、少しまとめをします。今、森山委員からお話がありましたし、高橋委員からは体を動かすことで自分の考え方が変わったというお話もありました。保護者が運動の体験をしていないから、子どもに運動させることができないのではないかという気もしますが、どうでしょうか。

○高橋委員

保護者には部活動をしてきた方もいらっしゃるし、運動が好きな方も沢山いらっしゃると思います。遊びの中で子どもたちが体を動かすということが、私はとても大事だと思っています。色んな事件があって、安全面への配慮から、今の子どもたちには放課後は学校が閉められて校庭に入れられない状況があります。町田市では「まちとも」などをやってくださっているので、それは本当にありがたいと思っています。

公園に行ってもボール投げが禁止されるなどして、子どもの遊ぶ場がない。また、子どもが遊びを知らない。ですから、遊びを教えるインストラクターといった方々を招いて、子ども達に遊びを教えるということも大事なことと思っています。

○石阪市長

ありがとうございました。予定されていた会議終了時間になってしまいました。委員長から一言お願いします。

○佐藤委員長

次の議題には、進めないのでしょうか。

○石阪市長

すみません。会議予定時間を過ぎてしまうので、次の議題に進むのは、事務局からストップがかかってしまいました。委員長としては、予算の話をしたかったということですね。今日はもう時間切れということで申し訳ないです。

○佐藤委員長

わかりました。では、2つ目の議題についてですが、今日は体力の向上、運動能力の向上の問題が強く出ており、体育の授業に期待するところが多いわけですが、学習指導要領を見ますと、体育の授業は明るく豊かな生活を営む態度を育てるものとされています。どちらかといえば、生涯スポーツというのでしょうか。大きくなってもスポーツをやるぞという人を育てようということで、運動能力の向上だけではなく、運動が嫌いという子どもを育てないようにするのも、体育の授業の大きな狙いだと思います。高橋委員がおっしゃったように、学校から帰っても色んなところで運動する機会が作れたら良いと思います。

○石阪市長

ありがとうございました。今の佐藤委員長や先ほど森山委員からも話がありましたが、学力と同じように、健康に生きていく、運動していくといった意欲や気持ちも体育のうちだということだと思います。家庭も含めて、教育の中でこういうことを身をもって、頭の中ではなく、まさに体で覚えてもらうことが大事だと思います。今日は2つの調査をベースに置いて議論頂きました。最初に申しましたが、調査の中の比較は必要ですが、そればかりではないというところに1つポイントがあるのかと思います。これは、家庭も含めた全体の教育とか学習のうちの一部での比較であって、全部ではないわけです。それは、

学力もそうですし、体力もそうなのだと思います。頭からつま先まで全部、家庭も学校も精神の力も含めて頑張っていく。この調査は、その中の1つ、議論のきっかけというぐらいに捉えていただいたほうがいいのかと思いました。以上で、総合教育会議を終了とさせていただきます。ありがとうございました。

○中村企画政策課長

では最後に、事務連絡をさせていただきたいと思います。すでに終了予定時刻を過ぎましたので、第3の議題につきましては、次回以降、また機会を見て行うことにさせていただきます。本日はここまでとさせていただきたいと思います。次回につきましては、来年度に入ってからの開催を予定しております。日程や議題等につきましては、改めて事務局からお知らせをいたします。

では、これもちまして、2015年度第2回町田市総合教育会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。

○石阪市長

大変長い時間、お話いただきましてありがとうございました。以上もちまして、本日の第1回町田市総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

【午後5時03分閉会】